

■ 研究演習紹介

社会福祉学科

池埜 聡ゼミ

「心的外傷（トラウマ）とは決して定義できない概念」という前提からこのゼミは始まりました。担当教員「『トラウマ』は社会が作り出した言葉で、被害に遭った当事者から生まれたものではないでしょ。じゃあ『トラウマ』って何」。ゼミ生「…………」。 「ぬかるみ」からのスタートでした。

存在そのものを脅かす出来事、災害、犯罪、戦争、虐待、事故の心理社会的な影響について読み解き、社会福祉分野論を横断するソーシャルワークの新たな射程を模索することを目指しました。PTSDや悲嘆といった心理的な問題に特化するのではなく、被害に遭った人々と社会とのインターフェイスにも視点をおき、被害者の生きづらさの実情と社会へのアプローチについて認識を深めていったゼミでした。

2011年12月、4年生7名と2年間の振り返りをしました。感想「よくやったなあ」。トラウマのインパクトをホリスティックな枠組みで提示した宮地尚子氏の専門書「トラウマの医療人類学」「環状島：トラウマの地政学」を読破し、各章についてレポート。そしてディスカッション。「難しかったあ！」。

その他5冊を読みこなしました（もちろんレポート付）。加害—被害といった単純な視点では捉えることのできない痛みの重層性に圧倒されることもしばしば。2年間で計23本のレポートを提出。それに3年次はグループ研究発表、4年次は卒論論文が加わるので、100ページほどの分量になります。「よくやったなあ…」。

「現場にできるだけ出よう」。ゼミ当初からの合言葉でした。JR脱線事故現場、沖縄ひめゆり、東日本被災地（石巻・女川・松島）、そして御巢鷹山。すべてゼミ生の主導で企画され、訪問が実現されました。犯罪被害者、DV被害者もゼミに招聘し、交流の機会を得ました（ついでにコンス

タントなゼミコンと??談義も)。五感すべてで人の痛みに寄り添うゼミ生の姿勢に、担当教員はただただ脱帽です。

ゼミ生「安易にトラウマという言葉を使う人に出会うと、『あのね、そんな簡単に使える言葉じゃないの、もっとふかーい意味があるの』っていいなくなる」「そうそう！」。

ほんの少し、「ぬかるみ」から抜け出してもらえたのかもしれない。7名のたゆまぬ努力に感謝、感謝。

(池埜 聡)

社会起業学科

川村 暁雄ゼミ

社会起業学科という「学問分野」が明確でない領域で学生は何を学ぶことができるのだろう。そして自分にどのような学びの機会が提供できるのだろう。この二つを考えた結果、当ゼミでは、共通テーマを決めず、3年の段階からそれぞれが関心を持った社会的な課題について学び、調査課題を見つけていくことにした（来年度配属の学生については、2年の後半からプレゼミを行い、さらに早い段階でこの作業を開始している）。この際、インタビューやフィールドワークを通じて現場の生の声を得ることを重視するのが、ゼミの特徴といえれば特徴になる。

担当講義には「国際問題論」「海外フィールドワーク」などの「国際的」な科目があるため、開発協力などの国際的なテーマに関心を持つ学生が来る場合もある。だが、実際にフィールドに入ってインタビュー調査などを行うことを考えれば、海外のテーマに取り組むことはハードルが高い。このため、現実には国内の課題を取りあげる学生の方が多い。

参加する学生には、社会起業について学びたいというよりも実践的な課題の解決能力を得たい者が多い。現3年の学生たちが関心を持っているテーマ（学問分野）は、地域包括ケアにおけ

る保健師の役割（保健医療、地域福祉、地域医療）、母子家庭の課題（社会学、福祉学）、途上国の農村開発（国際開発論、農業論）、助成財団の役割（非営利マネジメント論、社会組織論、NPO論）、CSRにおける労働者の権利確保（CSR論、人権論）、障害者雇用（福祉、マネジメント、社会的企業論）、フェアトレードとマーケティング（マーケティング論）などさまざま。来年度、さらにテーマは拡大し、セクシュアリティ、セックスワーク、国際文化交流、食文化復興まで含むような様子である。

学生は、自分に関心のある課題を理解するために、どのような学問分野について学ぶべきかなどは意識してこなかった場合がほとんど。このため、テーマを決めてからテーマを理解するための学問分野について学びを始めることになる。

真剣に特定の学問分野について研究を深めるといふことであれば、この方法はあまり好ましくないだろう。指導するこちら側も、すべての分野の専門家というわけでは必ずしもない。だが、一般社会では、自分が直面する問題について、専門家の知恵をかりつつ、現実と文献からすばやく学び、それなりに分析できるようになることこそが重要である。その作業をまずはしっかり2年間をかけて経験してみる。それは、一人一人の学生が社会に出てから生きていく力の一つになるはず。こちらから、学生たちの学ぶ速度になんとかついていなくてはならない。悪戦苦闘、綱渡りの日々が続いている。

（川村 暁雄）

人間科学科

佐藤博信ゼミ

人間福祉学部1期生のゼミ生も、あと3か月程度で卒業である。7人という比較的少人数でスタートした本ゼミの雰囲気は基本的にふんわり、やんわりであるが、近況は各自の卒論の完成にむけてあわただしさを増している。「身体運動

や身体運動文化の意味や価値」をテーマとしているが、特に現代の日本におけるスポーツの在りようについて毎週各自がトピックスを持ち寄り、それらについて全員でディスカッションをおこない、それらのフィードバックを通し、各自が考究を深めるといふスタイルをとった。したがって特にテキストは用いていないが、活発な意見の交換がゼミ生の意欲や探究心をさらに掻き立てたようである。とくに日本力や日本のスタイル、日本の形などについてのディスカッションでは全員が体育会に所属していることもあり、どうやったら日本のスポーツが世界で勝てるのかというような壮大な話にまでいたり、收拾のつかなくなることもあった。本ゼミで必要不可欠となるのは、未開社会におけるスポーツの意味、スポーツの起源。古代ギリシャの全人教育・人間形成、古代ローマに象徴される古代社会における、スポーツ専門家、いわゆるプロの誕生。一般史の中世・近世にあたる近代社会の準備段階としての前近代社会、現代のスポーツに最も影響したと考えられる産業革命の技術革新や、フランス革命を中心とした市民革命による国民国家の誕生、ナショナリズム、オリンピックの復活等々が成し遂げられた近代社会、そして第二次世界大戦の終結をいちおうの境として進んでいくスポーツの商業化や政治が及ぼすスポーツへの影響などの知識である。歴史や時代背景がどのようにスポーツに影響したかを知ることにより、現代のスポーツの在りようがいくつかのタイプとしてあらわれてくるのが理解できるようになる。そして、それらを自分の身近なスポーツに重ね合わせて考えることによって新たな発見が生まれるのである。また、折に触れKGのスポーツの歴史も学び、関学のスポーツの伝統、歴史のすばらしさ等を時代の流れとともに再確認し関学生としての誇りの醸成にも一役買ったのではないかと思っている。最終的には自分がおこなっているスポーツを中心に調査、研究がすすめられてきた。後は卒論の完成を待つのみである。スポーツの実践とともに汗を流し、その意味や価値を再認したり、大いに飲んで語り合う機会も持てた。私自身も大いに楽しみ、そして学ぶことの多い時間であったと思う。7人の1期生に感謝したい。

（佐藤 博信）